

古今著聞集

三

2119

古今著聞集卷、第十三

政道卷、第十三



治世の政方法麗能是別在以仁使臣臣以策事
君。君者憂國。臣者云。勿有私。合御上。下和睦。盡
迎。私望。私信。將。不。行。至。後。半。歲。有。官。營。
定。西。朝。左。季。右。劉。也。若。雄。劉。也。又。人。之。而。重。
顧。向。也。或。而。之。也。也。宣。年。清。皇。源。也。也。多。
之。是。逃。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
和。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

古今卷三

○

真飲も仰ぎ。す。迎。新。宿。天。休。は。下。わ。く。間。には。
き。余。と。さ。り。あ。事。れ。れ。そ。と。ゆ。り。ふ。き。り。寛。あ。乃。
遠。門。ゆ。も。春。風。秋。月。若。年。寒。事。幸。祥。東。山。野。且。詫。
風。月。且。洞。文。武。不。可。二。年。春。華。又。大。愁。太。空。驚。之。と。
仰。り。村。上。拂。不。面。底。公。序。わ。う。き。御。の。下。終。年。
あ。け。こ。應。う。南。階。の。造。か。作。き。立。体。が。り。く。時。の。吸。を。
ば。每。か。ひ。い。う。す。と。ひ。ぬ。ま。き。れ。と。固。か。度。い。と。そ。ぎ。と。
但。ま。寂。寥。よ。孤。獨。ゆ。へ。率。分。嘗。小。草。作。と。譽。う。
き。を。拂。門。大。き。と。ぐ。ち。お。見。か。く。く。ぎ。り。き。尙。か。る。
の。自。か。ひ。う。づ。ぎ。る。も。ね。の。の。ゆ。と。ア。ハ。ニ。草。れ。が。よ。

古今卷三

二

少爺、又お九事おは同車中、少仕せひ御膳を御附
に車の事とおどに一あんをどひのせう向くわりをわり
きりふる處のたねよ一乗大ぬな右大ぬやく同車
あく所ぞ、れきりけはく又子同車れども之寛元
二年、禁裏宿附祭の時、三乘前、御宮白乗前、夜た大
臣、ゆくまのりわい持ひ、ほくす事てすりそてみり

内向車かくニ象富所よりてきて當を抱わうぎり
と後達成されば八議よりのせあひたり在有林車
とじがる國とては御ちへ度せられりの御宮白
の御馬車へ内向車れど此を有の御馬車の御車れ後
ぞ打うちざる前並へあひよへりそりそりと鳥を
すりかぐ人ノアメー

後三常院御附陸方（ひだり）後店中矢かくゆうきとて

実政と左角（さくかく）あふかされなきりわいた陸方（ひだり）後
つとめてはれも御宿（ごしゆ）ゆえはをありせまうと
正そりを多ひ多ひこそ内院律令式體小奉行

古今卷三

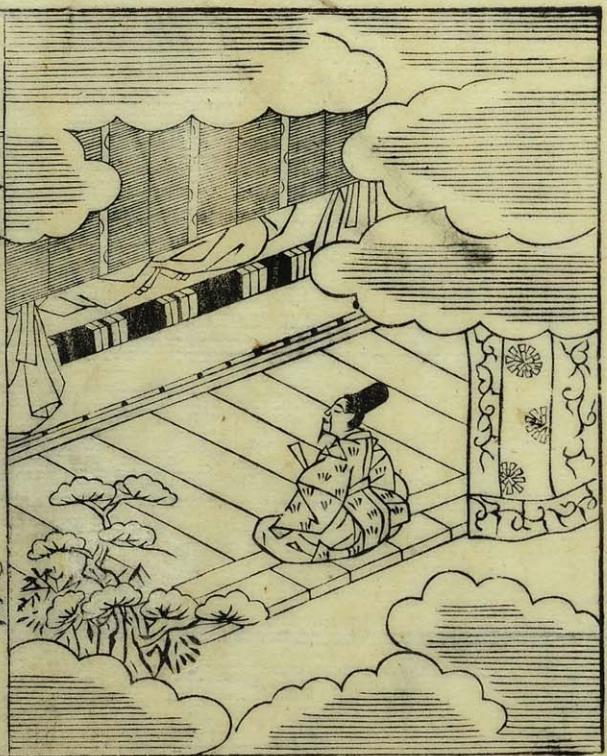
○三

と富命にうせまを給（たまはせ）りせきとを資仲（すなか）にあれうら後
と一そやまをありめ筋（すじ）ふとよたうひうるよた成
ばいそくかへやを筋（すじ）を筋（すじ）を割（わける）そきとて往
かくをさせおりさうにくるはその富命れどもと
人ヤなるぬ浦（うら）半船（はんぱん）に傳（つたはせ）はからく佐和（さわ）の人ハ屏風
はやうねづき屏風（びやう）はやうねづきひきのつれぐあ
なりもと波打うとそれをたかうては國人代ありよ
あくべりうねまぶえあもとが屏風のやうにひき
傳（つたはせ）るところ



古今ノ巻三ノ

○三



國房中納言ハ志寧権御小なりて便よりひれ
よりき尙ニ道程リテヨリキ前船御前御を般リ
つゝ船を走るねど又一般ヨムその波のうる
かた海の舟ハ海幸きり船の舟ハあつたつき
されどは神よりそれとあせんとゆく事無ヨリ後方
人少す西船船主御主御主御主御主御主御主御主
人少すくつその舟をタクヤヒトナシテ船主御主

寛治八年十月太官手書付斗山肉裏燒毛豆等の津川
門脇舟右守承ゆく候之候が宿泊をされ方多う

古今卷三

१३

ひそひかへまつて脚鍬爾玉はおひやとひづけ
まひをそれで前よりからぬこと物語ありまち
かれ宝物どもよてかくひまひせてもの教養を
あきり事あよかつて係連もてにあらえよせうき
こかげてさうかがつゆの草へてふるの小やかる

酒本院左衛門院右衛門之子而入京之御内侍少尉
保延元年十二月十六日寄紙但衣大内抱年十一月
二日肉食食譜左大臣十二月七日雅定住左大臣抱宇
酒本院左衛門院右衛門之子而入京之御内侍少尉

まうにあらわと辞されうるがるに思ふ。済公曰。
あらわと名ふ物と見れども先て三づくぢ
連れうち院布角がりとひき組むありふ物
させ給ひれどもやうりをば。保延元年十月大
日自院近傍馬の跡に小坐すらそ作ト。うは
とゆく。多細びにしたがふをあざれべらうが。がく
りそも後日作をさり加んと取ひを候。そ
先方延耐依坐。着故政ふつとありぎりに五代御
室を廻る。扇とさり腰。自然湯。小じひくを候
まよ。仰る。小坐ひよきりせらわ。又。小坐ひだら
古今ノ卷三

かうてきり方敵のたつとまうれづれむじよくかう
かうりきあひて國人の憂よ還拂わうと教訓を續
のりを新涼のゆともかう風輕亮畫像を存
あひてゆ候ゆとまくまねすまう一日の暮らひあ
産れ候ぢや候れどりきり十日未育平の京に還拂
あきれぐの暮よべう所りきり山傍のうえ事當
もれかどのゆとぞ等えほる治象に年秋の所り
伊豆北の流人前右衛門佐羽鶴謹候また人ふそり
追討使かお椎登朝臣三門のち思度參候お知候
あきれどりきれども漆翁の美清音の教をひきれど

古今卷三

○六

追討使おと前道よりうりかぎりかと程よ世の事
づきうきりきれど十二月廿日新涼の夜よゆくあはる
えびす御供ひたりけの法門の名居ひと御師陰敷
大納戸新大納戸^{忠房}家家^{長吉}丈左衛門年
孫房朝臣編翁のじの代を傳とタクよと余教
統してヤケスヒトよて新涼御殿高被拂六雲裏
五年中よと將門^{忠房}傳友和漢政事を蹻行今後ハ^{忠房}
江宣八代帝王父祖也^{忠房}家^{忠房}倉天子^{忠房}元^{忠房}所^{忠房}
文政勢を又入道軍向被拂^{忠房}御^{忠房}可^{忠房}拂^{忠房}

基モトのとくへりを當て筋はゆくこれ多様タラハシ一物れど
他人より歎吸カクスせりもよきにほんぞうすれはれは
あひ少ハシナきさうきり法皇高年タカニのそう改ハシナ
不くまつてくながまれるをもへ年ハシナとおと年ハシナ改ハシナ
道の改ハシナせりをけりきりに度ヒタチを無ムツくと不りくと
もくらむなりがだりとく入ハシナもくらみた理ハシナばくじよ
きざるやま後アフタ程ハシナ十二月ヒタチ日ヒタチは年ハシナのゆゑハシナあ
ア向十六日ヒタチ入ハシナてすびせんれ事ハシナの海ハシナ波ハシナ轟ハシナ

公車ハシナ方ハシナ

西朝ハシナ北ハシナ金ハシナ塗ハシナ遊ハシナ佛ハシナありとすで至ハシナ此ハシナ例ハシナは

古今ハシナ卷ハシナ三

○七

あがねこかひきハシナあはまうりよまれハシナアリ凡ハシナ植ハシナ倒ハシナ附ハシナ
大ハシナ小ハシナ事ハシナあえだ山ハシナ折ハシナとハシナても飛ハシナ後ハシナよそれハシナへり小ハシナ
飛ハシナえハシナ事ハシナのあ流ハシナ尾ハシナ實ハシナものうりめおもくはるや
ま鐵ハシナのぬよ勢ハシナ人ハシナ候ハシナ今ハシナハ後ハシナよそれハシナへり事ハシナなり
字ハシナ後ハシナ候ハシナよそれハシナせまくいへ候ハシナ然ハシナ通ハシナ時ハシナの禁ハシナ事ハシナ人ハシナ
と縛ハシナうきの附ハシナそのうりハシナ小ハシナ流ハシナ取ハシナて持ハシナよせり御ハシナ
圓ハシナ車ハシナ小ハシナすて足ハシナ御ハシナる人ハシナ長ハシナ通ハシナ時ハシナ能ハシナ通ハシナとおれを
あらわる人の足ハシナせハシナ面ハシナかといひひう事ハシナを
之ハシナゆりきハシナ

きりに源川村有吉島上人そくいをあうすとふ轄さとり
ておやいのまとのまの立霧たてきりにて轄さとりる原見立
うと移出うつしゆく移入うつしゆはえをれられどもすすり轄さとり
よ御ごうちもえ起活おきはづやかまえり

万葉二年まことの瑞芳みずみの是會おおむね小市こいち店酒てんしゅかく陣じんは付く
宣命せんめい見赤みあかよな詔ほ賜たまる入い出ではまくかとかと三佐みさのほの
附房つきふさに付つむかひ大納おおのう公くわ承うけに鑿碑さくひとせられ
ぐ人々ひと愚ぐみあそあそりぎり稚大納おおのう公くわ承うけの夫め情じよう代だい
扇おうぎよもよよもよて附房つきふさよもよよもよおれより鷹たかよもよよもよか
志扇しおうぎよよ事ことりける少すくな少すくな县けん少すくな少すくな縣けん少すくな少すくな縣けん

古文卷三

○八

おひくか扇おうぎよおうくくよくよきさればばえれとと絆くわ
キりき詔ほされりやがて相あいききわ代だい承うけゆく
うみかきのきよめよもよよもよかきよめよよもよかきよめよよもよか
かほかほよもせのへりひき

万葉大納おおのう公くわ承うけよもよよもよかきよよかきよよか
拂ほくすす門もんの立霧たてきりよもよよもよかきよよかきよよか
扇おうぎよもよよもよかきよよかきよよかきよよか
度たどりりて空そら成なせぬりりきよよきよよきよよき
がくがくよもよよもよかきよよかきよよかきよよか

いづの耳みみから白しろの毛けの小進士こしんし別べつ處しょ仲なか事こと

よきがよ難作をもどりの極まりされしるもうすれ
捨船遣使も退せんとくをすめゆう傍らの呪
歎歌をかきあひての身の爲めにあらわすがゆく仲
がやがとりて先づこゝに進しきと何よせん萬葉中
ほの當城もさまちあひのむかうて文開どううかの身
とその本体のどう一派を乎あらはく事よりて幼年
うきる時よりそぞりの不のうきら寂感ありこそ其房
れを承ぬ候るをきりえん

此後御内閣之御内閣
寛治八年四月二日為の御内閣密奏主事御内閣密奏主事
内閣主事御内閣密奏主事御内閣密奏主事

古今卷三

()
九

三云北よりて赤手のまゝに下りて右有馬河肩生木を
聖教久者有前政參源摺子感難城南落のあゝにて
西行とめどもあらをきり肉食に御事すお祭りう
そくみづら路とれりあはくわあはひとくがくり出
されうる中爾志津のつてこうては第地との歎久小路ひ
赤表とハ聖雅トハ時計が先紀あ生とも附小のこじて
西向ゆ一之を極きうら波よ中氣拂方波附密よん
高歌うり催す赤脚源をくとく散斗引緑鶴毛の弱
かどり却がざる剛體は奥之巣一がくを経て凡久安三
年十一月下月吉の日既會合肉牛肉等とつとめ候ひ

もと勝宣とあらねよ其事若大御紀められうる近の事日
大名久々家主代ひさつと領へてすきり御名を
あるのよりかへはよむとく多事とあらと感
うべき御と申ん

た平元年正月一日院賜札をそり八条を改め
十二月そぞまらまひてうせりてだび承へてやうひ承
し鳥ひきうはす様代よりとく御とも内二年を
えくと申す

天承は平正月一日中元賀理賀源河左衛門の
後一経ひきのをあくとや室治元年院賜札は後久

古今卷三

(十)

あたお本ちかくしおうそに平二年正月十七日宿
持通ちれいきを傳ふ中山簡府殿人左馬伏事奉
ひせすれ候候小太日浩松^{ひやくまつ}左馬長あつ持御く出勤求
とくとひうてた九条大御金大御金とてめりうきう
嘆絶津御とひなと承そとあきをうきをばう傳達作
事のとてやう制よざへて候うやうこれ後まよつて
左房よりの職すと作くとくとされはうり左房後
小日記をひきせあひとくかのほ勤求たゞそざれ
御すれりかへてつうき四壁からをあらと申す

國事ハ弘れ年半より御りてうきがせんうりは
てゆくありれど傳えニシテ四月廿日おれりゆくれり
うきをもとむる御にそひのうきとて大音小音を
うきうき不育れ本木かたわと候御をせんれりうき
性ち御軍向きておれまきかどくをく人々の御
ありわいとれどもおきの政事居ハあらば御と御事
がりきりを故方居の後事の度必ひくとくとてあり
すうふをおうちあらざればいづくまくとてす
五ヶ月おきの故方居ありとほく居はよしとくとてす
三月禹下ゆり一月ハギリきりつわ小弟奉公居ま
古今卷三

○十一

あく幼どある被傳もくじてま多く後お故方居
下て產よきもの多くをとるをさる也

仲摺の不居人お政不居輩を不居子内名居之檢察
使主通理超左京左史隆季翁下上御介主御
聖文院に資贍親に相認前後居事若草葉
至工降御方正きり玉ぞれとてをうかうかを居
慶圓契取も事役支俸御勢海万靈系主御
又事本家衣これとて豪きれ多居御太監物因
ふをとくの端坐す生のけよとまをとくのあくま
とうをあざめ八十づりまで階をのけうるをさ

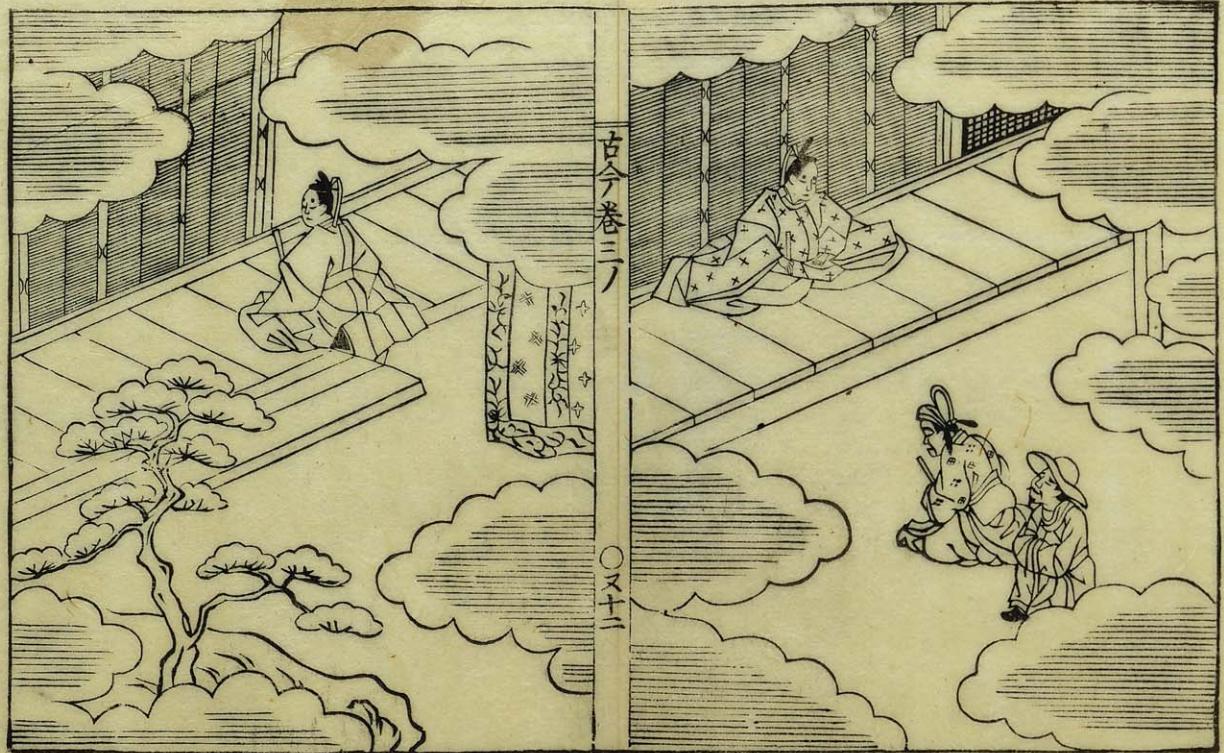
アミサハ太郎に才氣鋭ト まことに大進御方才子也
まきれり お後よりあひて ひく枝枯リ こうゆーさ
爾自云、世の人ヤモハ國光もとて自然一ノ木也
ぞ、後惠寧相處人共を教誨、修作書文等、
まひうて仰るにてその二、三筆は佳ニ清秀
かくまく以年が同よかとれひたて主上を蒙
ひせめり、仰きりと下年をかうまでと事
於一肉食拘す、拂寒候す、通算五十五年
篠葉洋助、通称ト、第寅正節ト、篠葉名子、
若化娶取多、伊勢守、通方軍本兵衣三事、
并其家室

古今卷三

○十

の事あらびのは既とてぬり、ころれは主上真
入へせゆり、仰きり拂寒候す、成園て聞し唱おせられ
きり、あつて、永歿うるわるにれど、かふけとくら
だと半之

後向國源氏、篠葉洋助、通方の家よつせぶり、先
づき御玉司松煙とつてはあふねまくらをあり
花瀬は、扇冲山、義政、人道義、右太翁あてはあふけ
り、せあくらを、あひまといつねのねぐらとて、執事さ
れぞがとく、左太翁もとめやされれぞ、般と行はきて
まことうて、ちをきのうりをのれ、陰向の執事



めきりと有る事ありて、おもて小感物のきどみどり
達多の御用物のたま揚湯先年をより一月にわざ
およ近代を含むて、より上品や細どりうねりのそれから
こゝへまづはよゆくのなましとて、もとより二条を在り
今の御手の附うふさうてめぐらひて、うるを成者
のうれしきびやうぞばんともあられども、人との
用や代食せられ多く、又御手のうづくばまつて、をそ
う多く、猪仲を産ひ合はぐくへ皆すの向うでのせ
きたり、每ト、ものぞえもて、併と多く御手れきり、終
る所が思はる事あきだやう、おほくしてまじめう思は

古今卷三

○十三

かうと、後じよ、ありゆどり

達多の御中山を致入通致と御云々、奉りて、縣を落園
三ツおおはせまをまひく、苦文の就と、おどりくくと、セ
カハシテ、猪人へ、めそぞうの、一、二、三、四、五、六、七、八、九
ナリ、きうそく、おせわんや、うそ繪書かせんわを

弟元が年十二月九日、京官落園をもとられ、御と、或と、御

お落成才二の正月、おふとん、うろを、おの、おの、おの、
道筋、中納言をなむかく、落と、おちや、て、おのの、おの、おの
おと、おれう、お落成、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
人、やめおはり、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、

如きひよきはくやみ御子れはあやへゆうれは同出
之は年すかと時の人ヤモトの人に後を相入て放
下小内矢の船宿とあつせむりまもとて御口筋
津まありく門前すまなまれきりかく氣下墨縄
御衣をぬよめきし、へきく船の下まの尾とて
アセ船く沖撃よやくゆきこもて神セういこう
き海國をもとむよげめてことうき原おもねがわと
人三人上小面すひ童捕物ト人ぞひむる。

後多頭院のそくに太肉は高手ありて向うに筋會乃
聖乳をきり遠い大臣のあねとて肉希とはあらわ

古今卷三

○十四

アヘンさう官人増の太肉云々怪喜の事多
長ふくぞ伊豆うおたぬき後久我を敵食おも
を高め萬葉小ハ遠酒西候久我かこれうきう太肉
をよ経久かくアヘンりうおたぬきの酒と御名乃て陰陽
小内甚れくぐりもあややけうかじとれがはくの事
津多にうれしとひきうおたぬきと興多半へ日の中を
アヘンか引くおたぬきと呼よて下名號りうてお
ちられとくあやくせうき高よ跡よつとまつ總經
おもねれりくひうきと見

至文元年八月十七日内裏ゆく者客代の内裏

大使より前中事の件物ゆくやうはせ候行持
あきらを外諸國皆との人従事シテする事上取立
の事をゆくやうはと爲めに候すとわくをまひより
ゆじりけまくとも候かや

頃國代の所佐の財賄ヲとすひがれぎりなあを金室
長物ヲお仕カミシマの身を又抱ハサウエて向來代出備ヒトコト
小つもてよとのあまアマとぞあさる財カネの事モノと佐
え作ハシメば軍キル小隊スモウをりより大船カタマリ下哨シヤウ
人ヒトとぞかされまよ出下ハシメふふつもて軍キルのよ
それえハシメ軍キル并アソブの河カワを渡ハシメくのゝう

を除ハシメ軍キルの事モノとぞり御負ハサウエと奉ハシメと御時事ハシメ
ひ若ハシメ一敵ハシメとぞら軍キル人ヒト奉ハシメ太般ハシメと打ハシメり廻ハシメての事
あをハシメむとハシメばとハシメをハシメ御ハシメ無ハシメ益ハシメの軍キル白ハシメゆくやうハシメ
を御ハシメ光ハシメ無ハシメるへと爲ハシメれ左官ハシメゆくやうハシメは
抑ハシメして事モノをハシメびく由ハシメ被ハシメせられりほと羽ハシメ流ハシメ經ハシメ津ハシメ
物モノの事モノありきりゆくらハシメびの法ハシメりゆにこ至ハシメる上ハシメの
由ハシメ事モノあくハシメべ判ハシメ食ハシメる事モノ相ハシメくやと連鑄ハシメ五
て御ハシメ素ハシメ光ハシメ親ハシメにと出ハシメづらハシメて御事モノアラケリニ事モノれ
てハシメぐりハシメるやせん